東方小異変

澄田　康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方小異変

【Ｎコード】
Ｎ０７４４Ｏ

【作者名】
澄田　康美

【あらすじ】
今日も平和な幻想郷。そんな幻想郷に、また異変が起きていた。
しかし今回の異変、あまりにも小さすぎていた・・・

（前書き）

前書き

この話は、秋の短編祭りをしていたうｐ主が、とうとうネタの限界に達してしまった為にやらかした話であります。

思いつめていたと言うとしかないでしょうかねぇ。

ギャグ、コメディ、シリアス、バトル、ほのぼの、その全てをこの話に突っ込んで・・・いてあればいいですね。

では、じっくりゆっくり読んでいってね！！

「・・・ない・・・ない・・・どこにもなぁぁぁぁぁい！！！！！！」

博霊の神社で、その神社の巫女は、賽銭箱の蓋を開けて、上半身を突っ込みながら叫んでいた。
何かをがたがたと探しているようだが、この様子だと何もないらしい。

「霊夢、もうあきらめたらどうだい？」

その後ろで、巫女の様子を察する鬼がいた。
しかしこの巫女、そんな事を言われてあきらめられる程、潔い心は持ち合わせていない。

「ふざけないでよ萃香！！昨日は珍しく誰かが賽銭を入れてくれてたのよ！？私にとって、日々の賽銭は死活問題よ！！」

なるほど、賽銭箱の中で探していたのは、賽銭のお金であったようだ。
確かにこの神社、今にでもつぶれそうな勢いである以上、少しの賽銭がこの巫女の生命線を繋いでいるのかもしれない。
そんな事を叫んでいても、ないものはない。必死な姿の巫女に、友人の鬼が巫女の体をぽんと叩いた。

「だからさ霊夢、犯人がいるとかそういうパターンは思いつかないのかい？」

鬼が何となく言った一言は、巫女に違う答えを見いださせた

「そうよ・・・それよ・・・異変よ！！そうよ、これはきっとそうよ！！」

異変・・・それは、幻想郷に平穏でない時が訪れた時の事をさす物である。
しかし、これがもし異変だと言うのであれば、えらく個人的な異変ではなかろうか。

「間違いないわ・・・おのれぃ・・・これは今までで、最も最悪の異変よ！！」

巫女の怒りは、文字通り有頂天に達していた。ここまでくると、本当に異変に見えてくる。
そんな私怨が固まっている有様の巫女に、鬼は割かし冷静に事を分析していた。

「まずさ、天狗とかに頼んで、幻想郷で他にこんな事が起こっているとか聞いてみようか。」

「えぇ・・・事は一刻を争うわね！！紫！！」

巫女がその場にいない友人の名を呼ぶと、その友人は隙間からにゅいっと姿を見せてきた。

「はいはい、ここに鴉天狗をつれてくればいいのね？ちょっと待ってちょうだい。」

ごそごそと隙間の中をいじくるような事をしていると、引き出しか

ら服を軽く取り出すかのような感覚で、幻想郷のブン屋を隙間から呼んできた。

「わわわわ！？な、なんです！？何が起きたんですか！？」

突然の事に戸惑った様子の鴉天狗だが、本質はしっかりとした妖怪。少しして、その状況を理解したようである。

「えーっと・・・多分ですけど、紫さんが私を呼んだんですね？」

「ええ。でもあなたに用があるのは、そっちの巫女さんよ。」

「あ、霊夢さん。どうしたのですか？」

「文ぁ・・・一つ聞きたい事があるんだけどさぁ・・・」

迫力満点の巫女に、さすがの鴉天狗もびびった。

「（こ、こわぁ・・・いつになく怒ってらっしゃいますなぁ・・・）えーっと・・・何ですか？」

「いやねぇ・・・この賽銭箱からぁ・・・賽銭を盗んだふとどき者がいる訳なのよぉ・・・最近、そんな噂聞かないぃ？」

「（そ、そんな命知らずな人、この幻想郷にいるんですね・・・）ふーむ・・・」

文がそんな事を思いながら、心当たりを自分の中で探した。

少しして、最近目立っている事をそれとなくピックアップした。

「あ、関係があるかはわかりませんけど、紅魔館でこんな問題が起きたらしいですよ。」

紅魔館
メイド長は日々忙しい。そして日々厳しい。
しかし、今日のメイド長は厳しいとかそんなレベルではなかった。
まるで阿修羅をその身に降ろしたかのような有様である。
そんなメイド長の怒りの矛先は、びびって真面目に仕事をしている妖精メイド達ではなく、鈍い上によく居眠りをしてしまう門番に向けられていた。

「ＺＺＺ・・・」

すやすやと安らかに眠っている門番。
しかし、今日はナイフが飛んできて起きるとかではなく、違う物が要因となって起きた。

「はっ！！これは！？」

門番がふと感じ取った、圧倒的殺気。
その殺気が誰の物か・・・答えは門番の後ろに、ごごごごごっと出ていた。

「さ・・・咲夜さん！？」

門番が振り向き、なぜ疑問を持って叫んだのか、それも無理はない

事だ。
なぜなら、そこに立っていたのは・・・メイド長の格好と髪型をしているが・・・腰が今にも折れそうな態勢をし、背景にごごごごごごごごっと言う音を鳴らしている者だったからだ。

「美鈴・・・ちゃんと仕事はしていたかしら？」

口調はメイド長と完全に一致していた。しかし、声色は男色マックスであった。
門番は目の前にいる存在を何とかメイド長と認識したが、それと同時に嫌な予感も感じ取っていた。

「ししし、仕事はしていましたよ、ささささ、咲夜さん・・・そそそそれより、今日はまたどうしてそこまでお怒りになっしゃっているのでしょうかぁ？」

「・・・あなたにはわからないわよ・・・」

「へ？」

「生まれながらにして・・・このハンデだけはどうあがいても覆せはしない・・・そう・・・これだけは・・・」

「だ、だから何がですか？」

「ザ・ワールド！！時よ止まれ！！」

門番が身の覚えのない事を尋ねようとしたその瞬間、門番の周りはナイフで一杯になっていた。

「そして時は動き出す・・・」

メイド長のその一言によって、門番を取り囲んでいたナイフが一斉に動き出した。

「私は・・・あ。」

門番がそれに気づいた頃には・・・門番はピチューンと言う音を鳴らし、ただのポイントに変わってしまっていた。
そんな様子を尻目に、メイド長は己の身に起きた不幸を語った。

「あなたにはわからないでしょうね・・・ない物を誤魔化す為の努力を・・・バッドをつけている健気さを!!」

そう、メイド長がいつにもなく怒っていた理由・・・それは、自分のパッドが盗まれたからであった。

そして、視点は博霊神社に戻る。

「なるほどね・・・盗んだ物は賽銭とパッドの違い・・・」

「てかさ、共通点がまったくない気がするんだけど?」

「いえ、これらには一つの共通点があるわよ。」

「何?」

「それは・・・その者の大事な物って所ね。」

「！！」

隙間妖怪から、それを聞き取った三人は、驚嘆の表情を浮かべた。
そのまま隙間妖怪が、話を続けた。

「今回の異変、もしかしたらだけど、次起きる場所がわかるかもしれないわね。」

「どこ！？それは一体どこよ！？」

慌てふためく巫女を、隙間妖怪は冷静に諭した。

「落ち着きなさい霊夢。まあ憶測でしかないけど、盗める上にその者にとって致命的に大事な物・・・これらの共通点を合わせれば、自ずと答えは出てくるわ。」

手の平で何かをイメージするような様子を見せ、隙間妖怪は答えを出した。

「次にその者が現れる場所は・・・白玉楼よ。」

「は、白玉楼ぅ？」

「どうしてまた、そんな所なんだい？紫。」

「単純な発想よ。最近の話だけど、幽々子がプリンを買って嬉しそうな様子を見せてたから、もしかしたら狙うんじゃ・・・」

と続ける前に、巫女が隙間妖怪に飛び掛り、胸倉を掴んでいた。

「それよ！！次は絶対にそこよ！！こうしちゃいられないわ！！紫、私とここにいる連中を、今すぐに白玉楼へつれていって！！」

「わ、わかったわ・・・わかったから、その手を離してちょうだい・・・」

隙間妖怪が苦しそうな様子で言ったので、巫女はぱっとその手を離した。

「それはいいんだけど、他の二人はそれでいいんかしら？」

鬼と鴉天狗に承諾の様子を尋ねると、二人は軽快に答えを返してきた。

「私は構いませんよ。面白そうな記事が書けそうな予感がして、むしろわくわくしてきます。」

「あたしはどうせ暇だし、それでいいよ。」

「そう、それじゃ、霊夢が急いでるし、すぐに行くわよ。」

大きめの隙間を開き、四人はその中へ身を投じていった。まだ事件が起きていないはずの・・・白玉楼に向かう為に。

白玉楼。
万年雪と西行妖が印象的なこの場所で、屋敷の主は鼻歌を歌ってご機嫌な様子。庭師は話し相手っぽい様子であった。

「うふふふ、あの食べ物があんなに美味しいだなんて・・・」

「私は、ちょっと奇怪な感じがしますけどね・・・」

主は喜び、庭師は心配そうな様子を見せていた。
そんな二人の所に、隙間からさっきの四人がどどどどどぉっと雪崩のように現れた。

「あらあら、邪魔しちゃったかしらね。」

「ちょっと紫!!なんで私の上にあんたがいるのよ!?」

「そういう霊夢も、あたしの上にいるんだがねぇ・・・」

「私が一番・・・下ですけど・・・」

四人が山積みの状態でがやがやと騒いでいれば、さすがに主と庭師の二人は黙るしかない。

「ごめんなさいね、幽々子。私達、これでもあなたの為に来たのよ。」

「何の事かしら?紫。」

「多分だけど・・・あなたのプリン、盗まれるかもしれないのよね。

」

隙間妖怪がそう言った瞬間、主の顔つきが明らかに変わった。

「それ・・・本当？」

「断定はできないわよ。でも、私や紅魔館にいるメイドのバッドが盗まれてるから、もしかしたらって可能性よ。」

「ちょっと待ってください。それらの共通点はどこにも・・・はっ！！」

「さすが庭師さんは勘がいいわね。だから、早いとこ対策なり何なり・・・」

隙間妖怪が何かを言っている間に、屋敷をタタタタと走っていく音がした。

「まさか・・・もう！？」

「私が追います！！」

庭師が我先にと、音のした方へと駆けていった。

「私達もすぐに・・・」

と巫女が勇んでも、こんな山積み状態ですぐ行動に移れる訳がなかった。

「・・・とりあえず、上から順に降りなさいね。」

白玉楼の食料庫前。
その前に、さっきここを走っていた者が、今まさに食料庫にその手を伸ばそうとしていた。
しかし、その手がドアノブに掛かる前に、その者の首の隣に庭師の剣がチャキっと並んだ。

「動くな。動けばその首を飛ばしますよ。」

庭師がそう脅すと、その者は言われた通り、その態勢のまま動かなかった。

「一体なんのつもりで、こんな事をしようと思ったのですか？」

庭師の質問に、その者は・・・不気味な笑顔を浮かべて、庭師の方に振り向いてきた。
その者は眼鏡をかけ、よく見れば女性であった。
気味が悪くなる程の不気味な笑顔に、庭師は何ともいえない嫌悪感に襲われた。
そしてその者が、ぼそぼそと話しかけてきた。

「・・・妖夢、あなたは今一人？」

「ええ、後で来るかもしれませんけど、とりあえずは一人ですよ・・・ちょっと待ってください、なぜ私の名前を知っているのですか？」

「知ってるよぉ・・・わしは何でも知っている・・・まあ、今あなたが一人であろうと何人であろうと、そんなの関係ないけどね。彼の前にはね・・・」

「な、何を言って・・・」

庭師がそれを感じ取る事もできず、庭師は凶刃の前に打ち果てた。

「ふう、やっと開放されたねぇ。」

「私、もう・・・ぼろぼろです・・・」

「そんな事気にしてなんていられないわよ。さあ早く、さっきの足音がした所へ向かいに・・・」

巫女の一声を遮るように、ある者の声がその場に響いた。

「その必要はないよ。こうして目の前に現れたからね。」

全員が一斉に、その声のした方に振り向いた。

そこにいたのは・・・意識を失った様子の妖夢を携えた・・・幻想郷では見かけない人間であった。

「妖夢!!」

主の問いかけにも、庭師は応じる事はできそうになかった。

「あなた・・・どういうつもり？」

「ははは、妖夢とおんなじ事聞いてきたよ。面白いねぇ。」

軽快な笑い声に、全員がえもいわれぬ怒りを覚えた。

「・・・まあ、どちらにしても、あなたが今回の異変の原因ね。」

「異変？これまた大層な物言いだね。まあ異変にはなるかな。とりあえず、こうして皆さんに集まってもらったってのが一番の狙いって奴？」

「！？」

その者の意味深は一言は、その場にいる者全員を疑心暗鬼に陥れるには十分過ぎた。

「盗む事自体は複線みたいなもんだよ。本当の目的は・・・あなただよ、霊夢。」

「わ、私？」

「そうそう、まあ正確に言えば、異変もなく退屈な幻想郷を・・・ちょっと盛り上げようかなって思っただけ。」

「それだけで・・・私の賽銭を盗んだ訳？」

巫女の荒げた声を、その者は諭すように接してきた。

「まあまあ、そう怒らないでよ。入ってた金額だって、十円やそこら・・・」

と語ろうとした時には、既に巫女がその者にお得意の座布団を放っていた。
シャアンという音とともに、無数の座布団がその者を襲い、ドドドドと言う音ともに着弾していった。

「ちょっと霊夢、屋敷の中で暴れないで・・・」

と主が言った時には、座布団をもろに喰らっていたはずの者が、なぜか既に外から五人を見据えていた。

「来なよ・・・屋敷は傷つけたくない・・・こっちだ。」

その者の挑発を前に、乗るのは明らかな愚の骨頂であろう。
しかし、今の霊夢に冷静さなど兼ね備えてはいなかった。

「上等じゃない!!手加減なんて一切しないわよ!!」

即座に屋敷の外に出て行き、その者の前に立ち向かった。

「霊夢、少し冷静になりなさ・・・」

「五月蝿いわよ!!あんたは黙ってなさい、紫!!」

怒りによって、巫女はかつてない程盲目になっていた。

「おやおや、いつもの冷静さはどこへやら・・・」

「あんたのその減らず口も・・・今ここで叩き潰す！！」
霊夢から放たれた弾幕は、その者に容赦なく襲い掛かっていった。
「あなたはまだ勘違いしているようだね・・・わしの力を。」
その者がそう言うと、弾幕はまるでその者を拒絶するかのように、四方八方へと散っていった。
「な！？」
霊夢は目の前で起きている事実を・・・信じれなかった。
それも当然である。何のモーションもなしに、弾幕をそらしていたのであるから。
「さて・・・今度はこっちの番だよ。」
そう言った瞬間、その者の周りに、隙間妖怪しか出せないはずの隙間が、無数に現れたのだ。
「あれは・・・私の！！」
と紫が言う間もなく、隙間からあらゆる物が、巫女に向かって飛んでいった。
「ゲートオブ・・・ヴァビロン・・・なーんつって。」
そんな冗談めいた台詞の前に、巫女は避ける事も叶わず、ただ打ち果てていった。
巫女が敗れたその瞬間、控えていた他の者が、我慢の糸が切れたか

のように、一斉にその者へと突撃していった。

「ゆるしゃしないよ！！人間！！」

「私の風の前に・・・散りなさい！！」

「私の技を真似るだなんて・・・いい度胸してるわね！！」

全員の一斉攻撃は、その者をよけれそうにない状況にまで追い込んだ。

絶体絶命かと思われたその者が、一瞬だけ、確かに微笑を浮かべた。

その瞬間、その者は三人の真後ろに、いつの間にか立っていた。

「・・・なんのつもりだい？」

「何をしましたか？」

「また、私の能力でも使ったの？」

全員が後ろに振り向き、その者を見据えた。

「・・・別に何もしてないよ。ただ、わしは君たちの傍を通っただけさ。それだけで、誰もが戦慄するんだよ。」

そう一言言った時、三人の体はずたぼろになって、その場に突っ伏した。

そしてその者は、眠りから覚めない庭師を抱えたままの主に、ゆっくりと近づいていった。

主は能力を使って、その者をどうにかしようと思ったが・・・後ろでぼろぼろになった三人の実力者を見た時、それは叶わないと悟っ

た。
その者がゆっくりと屋敷の主に手を伸ばした時。抱きかかえた庭師をぎゅっと抱きしめて、守るような態勢を取った。
その時であった。主の目の前の世界がひび割れていき、ガラスのようにガシャアンと砕けたのだ。

「ジャスト、一分だよ。」

その声が響いた時、ガラスが砕けて新たに見えた世界には、さっきの者がいず、誰一人として傷ついていないまま、誰もが呆然と立ち尽くしていたのだ。

「？？？？？」

誰もが訳がわからないまま、きょろきょろと周りを見渡した。

「あ、あれを見てください！！」

庭師が指差した先にあったのは・・・庭の真ん中にぽつりとあった、誰かのパッドと十円玉と手紙だ。
巫女がそれに駆け寄り、落ちていた手紙を真っ先に読み上げた。

「いい夢、見れたかよ。」

それを読み上げた時、巫女共々、その場にいた全員は、ただ笑うしかなかった。

東方小異変　ＦＩＮ

（後書き）

後書き

澄田
「全ては後書きで説明してやる！！そんなわしが、ここに参上！！」

リグル
「ぐだぐだになっちゃった＋時間ないから、かいつまんでの説明って奴ね。」

澄田
「えーっと、気になる事を説明してやりましょうかぁ！！と思ったけどぉ・・・やっぱ感想でね！！」

リグル
「こいつ・・・ふざけすぎだろぉがぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

澄田
「時間ねぇんだよぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

スペシャルサンクス

博霊　霊夢　様

伊吹　萃香　様

八雲　紫　様

射命丸　文　様

魂魄　妖夢　様

西行寺　幽々子　様

澄田　康美

リグル・ナイトバグ　様

では、このような駄文をお読みいただき、真にありがとうございました。

ｂｙ　澄田　康美

ＰＳ、このネタ全部わかる人、感想どうぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0744o/

東方小異変

2010年10月10日07時52分発行